

2022年9月29日

第2の社会人生を考える

人を相手にせず、天を相手にせよ - 西郷南洲

来年3月に群馬大学を迎える。その後の生き方をあれこれ考える。

- 伊能忠敬は家業を終えた後に日本地図作成の大偉業を成し遂げる。
- 「呉越同舟」「臥薪嘗胆」の故事成語で知られる越の范蠡はライバルの呉を滅ぼした後、なすべきことをなしたと越王勾践のもとを去り、その後商売で大成功をする。
- 老子「足るを知る」を説く。
- 菜根譚に 次の言葉がある。
「伏すること久しきは、飛ぶこと必ず高く、開くこと先なるは、謝すること独り早し」
- チャップリン「最大の傑作は」と問われて答える
「次回作だ(Next one)」
- 三国志の英雄 曹操 晩年に詠む。
「老驥櫪に伏すとも志千里に在り
烈士暮年 壯心已まず」
- 最近、国力がその国の人口と密接な関係があるとの記述を良く目にする。
大学の一研究室レベルでもそのことを実感する。研究室の学生が多ければ専任教員だけでは指導できないので共同研究者・外部からの指導者も求める。
人数が多ければ費用がかかるので予算獲得の活動を行う。
学生は対外発表をするとモチベーションが向上するので 学生が多ければ結果的に論文・学会発表数が多くなる。研究室のアクティビティが向上する。
しかし大学をリタイアすればこのようなことはできなくなる。
一方、諸子百家の書や司馬遷の史記の社会的・歴史的インパクトは極めて大きい。
今後はこのようなことを目指そうかと思う。

- 工学系の大学教員は「第 2 次産業」と「第 3 次産業」の両方の要素を持つと思う。日本の半導体企業にインターンシップに参加した学生からである。

「今日、1・2 年目の社員の方たちとお話する機会がありました。

どうやら小林研究室 HP に掲載されている資料が勉強用に大活躍されているみたいですよ...(笑)」

資料を公開するだけで、社会貢献になる。同様に、委員になっている国際学会の論文募集要項(Call-for-Paper)の案内を研究室 HP にリンクすることで、それらの学会への貢献および関係研究者への情報提供の成果を上げることができる。が、これができるのも残り時間が限られている。

- このコロナ下でオンライン化が進み対面の行事がキャンセルされている。

この状況が逆に自分の仕事の生産性を大きく上げている。

学生の研究テーマを考える、共同研究先に論文紹介をする、解説論文を書く等のために随分多くのオンライン国際会議に参加・聴講する。また、通勤の電車や待ち時間等で多くの本を読む。

大御所の先生が次のように言っておられる。

学生にはいつも以下のように言っています。

幸福な人生とは何かをよく考えなさい。お金は大事、だけどそれだけではないでしょう。40 歳でようやく人生の半ば。65 歳過ぎて社会から求められるのは如何？後半生を幸せに過ごしたければ若いときに本当の実力を身に付けなさい。

これは自分にも当てはまると思う。

が、この環境下で逆に(自己比で)実力をつけることができたと感じている。

定年を迎える、出処進退を考える時期 というのは人生での一種の極限状態と思うが、学んでいるとまだまだやれると精神的に前向きになれる。

「少にして学べば壮にして為す有り。

壮にして学べば老いて衰えず。

老いて学べば死して朽ちず。」

国学者 佐藤一斎